

問われたので、まず私から名告りをしよう。私は『悪しき事』も『善き事』も一言のものに言い放つ神、『葛城之一言主之大神』である。天皇はこれを聞いて畏まり、恐れ多いこと世の人間なので、あなたが神であることに気がつきませんでしつと。そして、大御刀と弓矢をはじめ、百官の人たちが着ていた服を脱がせ、拜礼して献上した。一言主大神は手打つて喜んで、その献上品を受け取った。そして、天皇が帰る時には、長谷の山の口までお送りしたという。一言主大神は、この時人前に現れたのだ。

雄略天皇の大人げなさや、意表を突いた一言主大神のお茶目ぶりが目につくが、この話は、葛城の神とも調和的な関係を結ぶ雄略天皇の偉大さを語ることに意義がある。そして、先回も話題となった「名告り」がこどもも話題となっている。先回の

「名告り」は求婚であり、その承諾としての「名告り」であったが、一言主大神が雄略天皇に対して「名告り」をすることは神の顕現を示す意味がある。例えば、『古事記』仲哀天皇条において、天皇が「なまなま(いい加減)」な態度で託宣を受ける途中に崩御した後、建内宿禰が再び託宣を乞い、墨江三神が顕現する場面においても、建内宿禰は神の名を問う、神はその名を答える。そして、「幣帛を奉り、我が御魂を船の上に納れ、亦、箸とひらでとを多た作りて、皆々大海に散し浮けて、度るべし」と祭祀の方法を教えているのである。雄略天皇と一言主大神との場合もその友好的な関係を語るだけだけでなく、その祭祀をも含めた関係性を物語っていると考えられよう。

葛城山は奈良盆地の西側を取り囲む葛城山地にある。主峰は金剛山(一一・二・二メートル)。その北に位置するのが葛城山である。ここは古代の有力豪族である葛城氏が本拠とした一帯で、金剛山には葛城を故郷とする「役小角」が開基したと伝わる金剛山転法輪寺が伝わり、一言主大神を祭神とする葛木神社が鎮座している。そして、葛城山東南麓には延喜式神名帳にもその名の記されている「葛城坐一言主神社」が鎮座する。地元では「言神さん」と呼ばれ、崇敬を集めている神社である。

近時、「君の名は。」というアニメ映画が流行っているが、「君の名は」と尋ね、それに応えるのはめぐりあつた男女の仲に限ったことではない。日本の古典の中における「名告り」の意味は深長である。

【お詫びと訂正】先月号にて、「稲荷山古墳」の所在地が「鴻巣市」とありましたが「行田市」の誤りでした。お詫びして訂正致します。

『万葉集』から見る日本の古典 ②
 國學院大學兼任講師 城崎 陽子

雄略天皇・その2

先回は『万葉集』巻一、一番歌を取り上げ、雄略天皇の歴史的伝承を記した。ところで、雄略天皇と言えば、葛城山で神と出会った天皇としてのエピソードを記紀(『古事記』と『日本書紀』)にもつ。今回は雄略天皇と葛城一言主大神との邂逅について記し、「名告り」ということの意味について言及してみたい。

『古事記』には、次の様に記されている。
 又、一時に、天皇の葛城山に登り幸しし時に、百官の人等悉く紅の紐を著けたる青摺の衣を給りて服たり。
 彼の時に、其の、向へる山の尾より、山の

上に登る人有り。既に天皇の鹵簿に等しく、亦、其の束装の状と人衆と、相似て傾かず。爾くして、天皇、望みて、問はしめて曰はく、「茲の倭国に、吾を除きて亦、王は無きに、今誰人ぞ如此て行く」といふに、即ち答へ曰ふ状も、亦、天皇の命の如し。是に、天皇、大きに忿りて矢刺し、百官の人等、悉く矢刺しき。爾くして、其の人等も、亦、皆矢刺しき。故、天皇、亦問ひて曰ひしく、「其の名を告れ、爾くして、各名を告りて矢を弾たむ」といひき。是に、答へて

曰ひしく、「吾、先づ問はえつ。故、吾、先づ名告を為む。吾は、悪しき事なりとも一言、善き事なりとも一言、言ひ離つ神、葛城之一言主之大神ぞ」といひき。天皇、是に、惶り畏みて白さく、「恐し、我が大神。うつしおみに有れば、覚らず」と、白して、大御刀と弓矢とを始めて、百官の人等が服たる衣服を脱かしめて、拜み献りき。爾くして、其の一言主大神、手打ちて其の奉り物を受けき。故、天皇の還り幸す時に、其の大神、山の末を満てて、長谷の山口に送り奉りき。故、是の一言主大神は彼の時に顕れたるぞ。

ある日、青色の上着に紅色の紐を付けた色鮮やかな、おそろいの服に身を固めた百官を引き連れて雄略天皇が葛城山に行

同じ返答が返ってきたのだ。頭に来た雄略天皇が、弓矢をつがえさせたところ、向こうの人々も同じく弓矢をつがえて構える。そこで、天皇は再び言った。「そちらも名を告れ、お互いに名告ってから矢を放とう」。これに対し、相手が答えた。「私が先に



葛城一言主神社



絵・橋本豊治

目蓮神通力は第一

45

句・菅谷秀文

釈尊の十大弟子の一人である目蓮尊者、パーリ語ではモツガラナ。舍利弗と並び称されており、「神通第一」といわれる。聴力に優れ、他人の心を見抜いたり、命を予見する能力を持つていたと言われる。釈尊の信頼も篤く、教団の指導的役割を担った。神通力を使って、亡き母が餓鬼の世界で食物を与えられず、骨と皮に瘦せ衰えて苦しんでいることを知り、そこで釈尊に相談したところ、母を救う為に雨期の定住の終わった(七月十五日)僧衆を供養することを教えられ、これを実行して母を救ったとされる。これはお盆の法要(盂蘭盆会)の起源となっている。